

【旧約聖書日課】 エレミヤ書 33章14～16節

14見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。15その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。16その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は我らの救い』と呼ばれるであろう。

【使徒書日課】 ヤコブの手紙 5章1～11節

1富んでいる人たち、よく聞きなさい。自分にふりかかってくる不幸を思って、泣きわめきなさい。2あなたがたの富は朽ち果て、衣服には虫が付き、3金銀もさびてしまいます。このさびこそが、あなたがたの罪の証拠となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くすでしょう。あなたがたは、この終わりの時のために宝を蓄えたのです。4御覧なさい。畑を刈り入れた労働者にあなたがたが支払わなかった賃金が、叫び声をあげています。刈り入れをした人々の叫びは、万軍の主の耳に達しました。5あなたがたは、地上でぜいたくに暮らして、快樂にふけり、屠られる日に備え、自分の心を太らせ、6正しい人を罪に定めて、殺した。その人は、あなたがたに抵抗していません。

7兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。8あなたがたも忍耐しなさい。心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからです。9兄弟たち、裁きを受けないようにするためには、互いに不平を言わぬことです。裁く方が戸口に立っておられます。10兄弟たち、主の名によって語った預言者たちを、辛抱と忍耐の模範としなさい。11忍耐した人たちは幸せだと、わたしたちは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにしてくださったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです。

【福音書日課】 ルカによる福音書 21章25～36節

25「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。26人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。27そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。28このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」

29それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。30葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。31それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。32はっきり言っておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。33天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

34「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に畏のようにあなたがたを襲うことになる。35その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。36しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

主が来られる！【こども説教のために】

「待降節（アドヴェント）」の最初のロウソクを灯す日を迎えました。ここに立てられたアドヴェント・キャンドルが、今年も、わたしたちを御子のご降誕へと導いてくれるでしょう。

昔の預言者は、告げました、「主なる神が恵みの約束を果たされる日が来る」と。「その日には、主から遣わされた者が、人々の前に立つ」と。

二千年前、主イエスは、弟子たちにお語りになられました、「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」と。「その日が、不意に…あなたがたを襲うことになる」と。

主イエスの弟子たちも、こう教えました、「主が来られる時が迫っている」と。「裁く方が戸口に立っておられます」と。

突然の来客のように、見知らぬ旅人のように、それどころか、力づくで襲いかかってくる強盗のように、その方はおいでになる、と言うのです。

神は、人が悪いのでしょうか。迎える者の都合を考えてくださらないのでしょうか。せめて、迎える準備ができている者のところから先に始めてもらえないのでしょうか。

安心してください。主は、すでにおいでになられたのです。もう始まっているのです。準備は済んでいます。わたしたちが気づかぬうちに。

弟子たちが呼びかけに応じて主イエスに従うようになる前から、主イエスは弟子たちのところにおいでになられていました。小さな幼子として。母と父に抱かれる嬰兒として。母の胎に宿る命として。

わたしたち一人ひとりのもとにおいでくださる神は、すでにおいでくださっています。そのお姿を、小さな灯の一つとなって、お見せくださっています。その灯は、間もなく、はっきりと見えるようになるでしょう。

戸口に立っている

前任地の教会で、わたしがまだ 30 歳代の頃でしたが、教会の青年数人と共にある仲間のアパートを真夜中に訪ねたことがありました。彼らは、教会学校時代からの仲間同士でした。ところが、あるとき、「さようなら」というメッセージを残して、連絡を断られたというのです。最悪のことを心配した一人が、牧師のわたしにも同行を求めて、真夜中にアパートを訪ねたのです。自家用車が駐車場に停めてありましたから、自宅にいると思われました。ところが、玄関の呼び鈴を鳴らしても、ドアを叩いて呼びかけても、応答がありません。窓の外から様子をうかがっても、人の気配は感じられません。一時間ほど呼びかけを続けましたが、その日は、あきらめて帰ることにしました。一緒に行った一人が、念のため警察に相談してみるということにしました。結局、最悪の事態ということは杞憂に終わりました。連絡を断った彼は、確かに思い悩むことがあったようでしたが、数か月後には、再び、何もなかったような顔をして教会に現れるようになったのです。

それにしても、真夜中にアパートの戸を叩かれたとき、室内に居たであろう彼は、どんな思いでそれをやり過ごしていたのでしょうか。あの真夜中の訪問が、彼にとって意味のあることだったのかは、わかりません。本人から、そのことについて話を聞くことはなかったからです。それよりも、隣室の住人にとっては、大きな迷惑だったことでしょう。よく警察沙汰にならなかったと、今さらながら冷や汗が出てきます。

教会には、いろいろな方がお訪ねくださいます。夜間は玄関の鍵をかけてしまいますので、余程のことがない限りおいでの方はありません。もっとも、それが、わたしどもが牧師館で休んでしまっているからだとするならば、申し訳ないとも思います。先日、夜中に会堂一階で仕事をしていて、ふと部屋を出たときに、玄関先にある人影に気づきました。驚いて身を隠して、様子をうかがいました。玄関の扉の前に立って、祈っていらっしゃるようでした。迷いましたが、そのまま様子をうかがっていると、しばらくして帰って行かれました。黙って見送った後になって、少し後悔しました。玄関ホールの照明を灯し、扉を開けて、中に迎え入れるべきだったか、と。あの人は「主」だったかもしれない、主が遣わされた人だったかもしれない、と。

今のような時代でも、教会に救いを求めておいでくださる方がいらっしゃいます。いいえ、今のような時代だからこそ、なのかもしれません。この時代の世に息苦しさを憶え、どこかに息つく島がないかと探し求めて来られる方が、せっかく訪ねてくださっても、教会が、牧師が、失望しか与えられなかったとしたら、本当に申し訳ないと思います。

神の国が近づいている

教会が、一人の人の身を寄せられる場所となることができるのなら、そのための働きを疎かにしてはならないと思うのです。

わたしたちの多くは、すでに教会を「我が家」のようなところとしてきています。日曜日の礼拝や平日の集会においてになられて、「ただいま」とご挨拶くださる方があります。「行ってきます」とお帰りになられる方があります。皆さんにとって、教会がそのようなところになってほしいと、牧師は心から思います。人生という地上の旅を歩まれている皆さんが、いつでも帰って来られる実家のようなところ、最後に帰って来ることができる我が家。教会は、すべての人にとってそのような場、そのようなところ、となるべきです。

けれども、その思いが強くなると、わたしたちは、どこかで教会の「内と外」に線引きし始めてしまうかもしれません。無意識のうちに、「教会の仲間」と「外部の人」とを分けて考えてしまう。本当は、わたしたちは皆、「外部の人」だったのに、受け入れられて「教会の仲間」とされてきた者なのに、仲間意識が強くなりすぎて、「外部の人」を受け入れることが後回しになってしまうことが、あるのです。縁もゆかりもない教会を敢えて訪ねて来られるような方に、思いを寄せ、寄り添うことが疎かになってしまうことが、あるのです。

教会が、訪ねてきてくださった方をかえって絶望させるようなことになっていやしないか。その教会に、主イエスは、「わたしは戸口に立っている」とおっしゃられる方があることを、お示しくださったのでしょうか。いいえ、主イエスこそが、「わたしはあなたの戸口に立っている者だ」と、弟子たちのものにおいでくださったのでしょうか。

あの、真夜中に訪ねたアパートで、戸口の向こうに立っていたのはどちらだったのかと、思い巡らすことがあります。わたしと教会の青年たちは、戸口の外で、室内の彼に呼びかけていました。室内に、彼はおそらく居たのでしょう。何かに絶望して、仲間との関係を断とうとしていました。戸口の外から呼びかけた青年たちは、関係を断とうとする仲間に、失望しかけていました。そのとき、アパートの扉が開かれることはありませんでした。それでも、わたしと青年たちがそこに立っていたことには意味があったと、わたしは思います。戸口を挟んで、わたしと青年たち、そして室内の彼は、確かに新しい関係を始めようとしていたと、言えるからです。数か月後、何食わぬ顔をして教会に来た彼は、確かに、以前よりも穏やかな顔つきで、仲間との交わりに身を置くようになっていたのですから。

「わたしは戸口に立っている。目を覚まして、祈っていなさい」と、主は呼びかけられます。戸口は、いつか必ず開かれることになるでしょう。